

イギリスの Cambridge 大学、Information Engineering の Control Group Ph.D. コースに在籍しております、山本薫です。PhD コースも 3 年目の終わりが近づいて参りました。前回からの半年間の研究進捗状況等を報告します。

【研究進捗状況】

前回のレポートで、イタリア・フィレンツェで口頭発表をすることになったと書きましたが、幸いたくさんの方に聞きに来ていただくことができ、質疑応答の時間やセッションの後でも何人かの研究者と有意義な議論ができたので、まずまず成功だといってよいと思います。また、ジャーナル論文ですが、およそ半年前に書きはじめ、その後いろいろと紆余曲折を経て、ようやくサブミットできる状況まで漕ぎ着けました。証明の細かいところの詰めを行ったり、できたと思っていた証明の小さな穴を発見したり、なかなか思うようにいかないことが多く、予想以上に時間がかかってしまいました。このジャーナル論文の内容が私の PhD 論文の中心となる内容なので、一通りできあがってほっとしているところです。この内容に加え、現在取り組んでいる研究の目途が着き次第、PhD 論文執筆に取り掛かろうと考えています。

【ワークショップ】

指導教員に連れられ、5 月末、ドイツのヴェルツブルクで行われた小さなワークショップに参加しました。限定されたテーマのかなり小規模なものだったので、その分参加者間で活発な密度の濃い議論が交わされ、とても充実していました。研究そのものだけでなく、ベテラン研究者たちがいかに議論を進めていくか、どのように難しい問題にアプローチしていくか、という点でも非常に興味深いワークショップでした。

また、この 9 月末から 3 週間、スウェーデンの Lund 大学に客員研究員として滞在することになりました。滞在の最終週に大規模なワークショップが開かれ、主にヨーロッパ各地、およびアメリカから十数名ほどの研究者が発表に訪れることになっています。国際会議に比べ、密な交流が期待できるので、今から楽しみにしています。

日本にいるとなかなかこういった機会が少ないので、様々な国の研究者との交流という面でも、海外に学位留学をしていてよかったと思います。と同時に、日本でもこのような機会が増えるような努力が必要だと思えます。大規模な国際会議とは違い、ワークショップ程度であれば、オーガナイザーがまず知り合いの研究者に声をかけ、その研究者が同僚や学生に声をかける、という風にして成り立っていることが多いように感じます。おそらくですが、声をかける研究者を選ぶ基準は、「ヨーロッパ圏だし近いから来やすいだろう」とか、「この間のワークショップでは呼んでもらったから今回は彼を呼ぼう」とか、ある種

友達付き合いの延長のような感じなのではないかと思います。このような慣習がいいか悪いかは別にして、これが、地理的に不利な日本にいる研究者にあまり声がかからない理由のひとつではないかと思います。研究者間の交流は絶対ではないかもしれませんが、ある程度必要なものだと思いますし、時としていい刺激をもたらしてくれます。もちろん、情報収集という面でも、実際に交流することはよいことだと思います。地の利のない日本の研究者が、もっと機会に恵まれるようになるために、まずは自分から積極的に海外から研究者を呼んだりワークショップを企画したりして、この流れの中に食い込んでいくことが必要なのではないか、と感じます。そうすれば、トップダウン方式で日本の学生にもチャンスが生まれ、日本の大学の活性化にもつながるのではないかと思います。

【生活】

この半年間で、学会も含め、ヨーロッパを何か国か訪れました。フィレンツェは二年前にも行ったのですが、やはり美しい街だなあと感嘆しましたし、ヴェルツブルクも小さい街ではありましたが、とても魅力的でした。歴史を感じさせる美しい街並みの中に、突如第二次世界大戦の生々しい傷跡を感じさせる場所があり、時として複雑な思いを抱きながら街を散策して回りました。実際にその場にいる、というだけで、本やインターネットで読んだときとは比べ物にならない感覚が押し寄せるものなのだ、と改めて実感しました。先日パリにも訪れ、溢れんばかりの芸術に触れることができ、感銘を受けました。

芸術鑑賞はもともと好きな方ではありましたが、イギリスに来てから、ヨーロッパの芸術や歴史に触れる機会は圧倒的に増え、身近に感じるようになりました。ヨーロッパの美術館はたいていとても広いので、混み過ぎておらず、絵画の前でぼーっとその作品を描いた画家の心情に思いを馳せたり、当時の社会背景と照らし合わせて自分なりの解釈を試みたり、など、贅沢な時間を過ごすことができます。また、憧れていた建築家の作品を訪れ、中に入ると、光の取り入れ方、歩いていくうちに移り変わる建物の表情など、写真で見ただけではわからない感動に出会うこともできます。パリの街を歩きながら、アール・ヌーヴォーがなぜアール・デコに取って代わられたか、自分自身が受ける感覚をもとに考えることができるというのも、とてもありがたいことだな、と感じます。

イギリスに来てから、芸術はやはり人生を豊かにしてくれるものだと実感しました。日本でも芸術に触れる機会はたくさんありますが、ヨーロッパではそれが溢れており、時として生活の一部でもあり得るため、そこまで意識せずとも芸術に浸ることができます。このような経験ができていることを、心から幸せに思います。

以上、留学先からの報告です。

山本 薫